

認識の再考—地域研究を通じた現地との対話

上水流久彦

地域研究が「現地調査」を意味するのであれば、文化人類学は地域研究をせずには成立しない学問である。原則、博士論文執筆のために1年から2年ほど現地で調査を行い、その後も現地での調査をしていく。現地で集めた豊富な資料と厚い記述がなければ論文にはならない。したがって、公表されているデータと理論を付き合わせるだけでは、学問的に不十分である。

筆者の場合、現地調査のなかで書くべきことが常に見つかる。帰国後データを眺めていたら、書きたいことが見えてきたということはほとんどない。それだけに現地調査は論文を書くうえで欠かせない作業であり、1年も調査地・台湾に行かないと、書くことがすぐに枯渇してしまう。現地調査のなかで、他人の論文や本で書かれていることに違和感を覚えるのだ。その違和感が論文の主張となっていく。

例えば、このようなことがあった。5年ほど前であるが、1994年から知っている高齢の方に、お茶を飲みながら彼の人生について話を聞いていた。そうすると、彼にとって重要な分かれ目が1947年になっていることに気づいた。その時より6、7年前に聞いた時は、1945年であったのにである。それはどうしてだろうか、その帰りに考えた。そこで思ったことは、そもそも自分は6、7年前にどうして1945年という年号で区切ったのかということである。それは、彼も含めた高齢の現地の人々の戦前、戦後という言葉、自分自身が1945年という、さらに言えば、8月15日という日で区切っていたからである。彼らにとって戦前と戦後という区切りは、日常の暮らしのなかで徐々にできあがったものである。しかし、その日常の暮らしを体験していない筆者は、頭で覚えた戦前と戦後を、無意識に彼らの歴史認識にも当てはめていたのである。

それだけではない。1945年8月15日は、日本の歴史を学んだ者にとっての区切りであり、台湾では違う。台湾はその年の10月25日が重要であり、

国民党が正式に台湾に来るのは 1949 年である。そして、台湾にとっての悲劇である二・二八事件（国民党の圧政に苦しんだ台湾の人々がその圧政に抵抗した事件。一旦自らの非を認めた当時の台湾の統治者陳儀は、裏で中国本土の国民党に軍隊の派遣を要請し、その軍隊が台湾に到着するやいなや抵抗に関与した台湾の人々を大量虐殺した）は 1947 年 2 月 28 日に発生した。これらの日も台湾の人々にとっては重要であった。調べてみると、日本で書かれた教科書や台湾の歴史に関する新書は、台湾の歴史の記述に拘わらず当然のごとく 1945 年 8 月 15 日を区切りとしていた。それに筆者も染まっていたのだ。

この経験は、台湾の人々の生活史を聞き、記述する作業をしていた自分が如何に台湾ではなく、日本という歴史認識の枠組みのもと聞いていたかを痛感させた。また改めて国家の歴史とは違う視点で歴史を書こうとする者がなすべき点を認識させた。そして、筆者のような聞き取りと記述がどのような問題を見えにくくしていたかを中心に論文にまとめた。現地で高齢の方とお茶を飲みながら話をしていなければ、見いだせなかった問題である。

このようなこともあった。戦後、台湾に国民党と渡ってきた人々を台湾では、「外省人」と呼ぶ。本人達の多くは、出身地から「広東人」や「上海人」、「山東人」などと言うのだが、台湾にもともと住んでいた漢人（こちらは本省人という）は、「外省人」を使う。最近、外省人の 2, 3 世のなかには外省人を自称で使う人もいる。

外省人のある女性（七十数歳の）の家に、食事のために友人と一緒に迎えに行った。彼女とは二、三回会っているのだが、改めて自己紹介をした。そこで筆者が、「台湾の文化を研究している上水流です」と言うと、彼女はうれしそうに「そう、それではいい物を見せてあげましょう」と答えて、自らが北京を観光した時に買った乳児の服装（おしりが割れたもの）を見せてくれた。筆者は、中国ではなく、台湾とわざわざ言ったつもりであったので、北京の乳児服を見せられた時には正直驚いた。その後も次々と中国本土で買った物を筆者に見せてくれるのである。

台湾とはどのような国であるかは、ここ長らく台湾で問題になってきたことである。中国国民党の党是は、中華民國の領土は中国本土も本来含んでお

り、ただ現在は実効支配しているのは台湾だけであるというものである。いつか、中国本土を中国共産党から取り戻すというわけだ。しかし、最近の台湾の民主化と民進党の政策によって、台湾は台湾ではないか、中国本土とは違うという考え方が広がってきた。そのような動きをこの女性も知っており、話している時には一定程度理解を示していたので、彼女の行動に一層驚いた。

だが、その時、改めて外省人の第一世代の心象地理を見た思いがした。いくら言葉で分かっている、彼らにとって自らの文化は、中国の文化であり、それは決して台湾に限らない。台湾も中国という（中華人民共和国ではなく、中国という土地と文化）大きなもの一部であると思っているのだと感じた。この経験は、現在、まだ論文にはしていないが、台湾という地域をどのように想起するかという、国家観の問題を考える重要な手がかりになるものと思っている。政府やマスコミが何を言うかではなく、人々がどのようにイメージしているか、その差異や思いを理解することが、筆者に課せられている課題である。

データや理論から見えてくる対象社会の姿もあることは確かである。だが、それだけでは見えてこない、見落としてしまう、掴み損ねる姿があることも事実である。地域研究という現地調査は、そのような姿を見せてくれると同時に、こちら側が勝手に思いこんでいる地域という単位さえも崩してくれる。地域研究は筆者にはそんな存在である。